



## 「ボタン」



みなさんは中原中也という詩人を知っていますか。『汚れちまった悲しみに』という詩が中学や高校の教科書に採り上げられているので、知っている人も多いのではないのでしょうか。日本人の感性に訴える繊細な抒情詩を残した詩人です。今回採り上げる『月夜の浜辺』も知る人ぞ知る傑作ではないかと思います。

月夜の晩に、ボタンが一つ／<sup>なみうちぎわ</sup>波打際に、落ちていた。  
それを拾って、役立てようと／僕は思ったわけでもないが  
なぜだかそれを捨てるに忍びず／僕はそれを、<sup>たもと</sup>袂に入れた。  
月夜の晩に、ボタンが一つ／波打際に、落ちていた。  
それを拾って、役立てようと／僕は思ったわけでもないが

月に向かってそれは<sup>ほう</sup>抛れず  
浪に向かってそれは抛れず  
僕はそれを、袂に入れた。  
月夜の晩に、拾ったボタンは／指先に<sup>し</sup>沁み、心に沁みた。  
月夜の晩に、拾ったボタンは／どうしてそれが、捨てられようか？

少し長いですが、全編を載せてみました。詩人が鎌倉に住んでいた時に書いた詩なので、たぶん、材木座あたりの鎌倉海岸が舞台になっているのでしょうか。波が打ち寄せる、その波打ち際を歩く詩人が、ふと見つけたボタンに、どこか自分と同質のような何かを発見したのでしょうか。ボタンを拾い、投げ捨てるにしのびなく、<sup>ふところ</sup>懐に入れたというのです。

月に向かっても波に向かってもボタンを放り投げることはできず、懐に入れた詩人の心情を思いやるべきではないでしょうか。それは懐かしい気分、どこか懐かしい心情と言っていいかもしれません。

我々の心の中に、詩人の拾ったボタンのようなものを、誰でも持っているのではないのでしょうか。ただ、日頃の忙しさにかまけて、つい忘れてしまいがちです。時々、このボタンのような懐かしい存在を思い出すことも、生きる上で大切なことかもしれません。新しい学期が始まり、忙しい高校生活の中に埋没してしまうかもしれないみなさんの、その防波堤の意味をも込めて、時にこのボタンの存在を、思い出してくれることを願います。そのボタンが、みなさんの日常生活に確かな潤いを与えてくれることを願ってやみません。